



Title	第五章 國民社會の社会構造 30
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	『鈴木栄太郎著作集 7 (国民社会学原理ノート)』を出版した際のソースとなった原稿である (同書内での言及による)。
Issue Date	1963-10-09
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77621
Type	manuscript
File Information	I037_0130S38.pdf



K-6

30

84

NOTE BOOK

CONTAINING BEST RULED FOOLSCAP

水五章

国民社会の社会構造

昭和十八年七月十九日

A
30
ノ
353



意匠登録
No.151492



30

衆知と都知と都知と都知と

（終）
歩編 民衆の社会生活
（以下省略）

（一）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（二）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（三）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（四）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（五）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（六）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（七）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（八）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（九）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（十）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（十一）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（十二）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

（十三）
民衆の生活と社会生活
（以下省略）

任 澤 人、その位、終るを、
 留 制 度 の 制 度 引 下 建 設 展 望
 地 是 人 不 可 少 力 一 用 界 友 誼 の 思
 休 着 の 計 策
 信 仰 の 自 由、終 究 の 罪、一 例、大 元 形
 天 宇 形 の 我 制 度 の 思 考 の 時、
 本 人 の 神 は 除 け ば 何 様 刺 刺 刺
 本 人 の 宗 教 別 無 事、
 後、統 治 者 に 対 して、
 絶 対 服 従

古 来 の 宗 教 任 男 女 の 性 協 力 作 の 外、老 若 協 力 作
 血 縁 協 力 作 下 あり。

終 結 的 意 義

一、口 舌 言 語 の 移 動

一、場 合 々 々 の 移 動

二、思 想 協 力 作

二、昔 古 文 化 の 思 考

三、柱 石 的 思 考

四、心 理 的 思 考

五、協 力 作 思 考

六、終 結 的 意 義

七、終 結 的 意 義

八、終 結 的 意 義

九、終 結 的 意 義

十、終 結 的 意 義

十一、終 結 的 意 義

十二、終 結 的 意 義

十三、終 結 的 意 義

十四、終 結 的 意 義

社会心理学讲义

17才に及ぶにあつては、
學問の

各種の
とと
機質の
編纂
合刊
勸
丹寧

④

金口證券集團一覽

東洋のり

1. 行政的証券集團

2. 氏子集團

3. 檀位集團

4. 清心集團

5. 近隣集團

6. 經濟的集團

7. 特殊出資集團

8. 官設的集團

9. 血縁集團

10. 階級集團

都市のもの

1. 世帯（同居集団）

2. 職域集団

3. 生活抗克集団

4. 地区集団

5. 学校集団

6. 行政集団

7. 生業集団

8. 商店街組合

9. 同業組合

10. 労働組合

日本国民生活に与るものたる集団より
これらの数種及び都市のもの以外の

社会集開ししあけ
思はな
あ
り

又一定の地域の上に定まる同位市積の圏を
として認め得るものとして

表すにわけ。その

一、第一生活地区

二、第二生活地区

三、第三生活地区

都市にわけるとする

一、第一生活地区

二、第二生活地区

三、第三生活地区

又都市の外周に及ぶ同一位の圏を
として認むべきものとして

一、都市生活圏

二、都市存在圏

三、都市利用圏

四、都市支配圏

五、都市勢力圏

（おけあに打ち都市に）

以上は本口と此方にとりては、都市集団の各
種及び此方地域圏の各種はこの口には
ない。金田元集団及び此方地域圏より
つくられてつゝものと考へるべき。

然るに此の口には、都市の社会集
団及び此方圏の中、何れかの社会集団
又は地域圏から、此方圏の活動の
核幹を成し、その都市の活動の如何

か、金に民生活の消長を意味して、
そのものであつかうと云ふ事である。そんな
な精神的集團はあり得ないかも知れ
ぬ。集團は皆相手の力をもち、その時々
の必要に応じて力は耐え不飽々の集團
のよにならなければならない。然しある程度
の精神的集團は常に他を制圧する力
をもつていふのから知れぬ。

この同じの集團と直ちに思はされるのは
口家の中に説及に唯物論的見方である。
口民生活の安全のためには皆物的見方は
見逃しはならない。又口家の
口民生活の制圧
の力を見逃さずありあかる。この二つは事

西橋の如き同僚を以て口説きを運
んではいふてみよと云はれり

七月二十五日

農村が都市に支配されてゐる
ことを認めて、農村の復興に力を
注ぐべきである。

農村と都市とは都市が支配されてゐる。

農村が都市に制圧されてゐる事は、
已に用である。今日の農村の停滞
を決定するのは農民自身の力でない。
人間の歴史の如きものは、いへば農村
が都市を支配した時がある。むしろ
農村を搾取する過剰の上に都市を
中心として、人間文化の成長は実現
され得たのである。

今日の都市の企業と同様の利潤を
農業企業が得るために、
耕作を奨励する。これは、
農民が一戸当り六十町歩を耕作
する。

に毛

泉

すまじば農家は都市の企業と並みの
生活は出来ない事を意味しては、
何れの場合も農家は都市に支配されて
おる。

都市が支配する。そのは都市にあり
ゝ何かの機関が農村の人々を支配す
と考へてゐる。この是都市にありと農
村支配の機関は行政的機関と交易
機関の機関である。金口民を支配す
機関は都市に存す。何かの機関で
あると考へてゐる。

職場か世帯か

都市が繁華を支配する傾向の存す

事を明かした^{生活}が^{より}果^然然^然

¹⁴都市に^{生活}おいては如何なる集團が

支配的であるか

私の理解より^{生活の}都市は^{より}果^然然^然

支配的である^{生活の}は同居集團(世帯)

と職場(機關)の二つである^{生活の}この支配の

上に學校集團、生活集團、集團、地区

集團が從属している。

世帯は機關の内では機關が支配的である。

あゝのは産業革命以前の傾向である。

あゝ、五水、五水、世帯が機關である。

人生の第一は健康にあり、健康を失ふれば、
何事も成さず、苦痛の連続である。

そのためには、まず生活習慣を正し、
適度な運動と休息を心がける必要がある。

また、食生活も大切で、バランスの取れた
食事を摂ることが健康の基盤となる。

そして、精神的な健康も大切で、
ストレスを溜めず、心身の健康を保つことが
求められる。

このように、健康は人生の基盤であり、
それを失ふことは、人生の幸福を脅かすこと
となる。

したがって、健康を維持するためには、
日常生活の中で、健康意識を高く持ち、
適切な行動をとることが大切である。

健康は、人生の最大の財産であり、
それを失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

健康を失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

人生の第一は健康にあり、健康を失ふれば、
何事も成さず、苦痛の連続である。

そのためには、まず生活習慣を正し、
適度な運動と休息を心がける必要がある。

また、食生活も大切で、バランスの取れた
食事を摂ることが健康の基盤となる。

そして、精神的な健康も大切で、
ストレスを溜めず、心身の健康を保つことが
求められる。

このように、健康は人生の基盤であり、
それを失ふことは、人生の幸福を脅かすこと
となる。

したがって、健康を維持するためには、
日常生活の中で、健康意識を高く持ち、
適切な行動をとることが大切である。

健康は、人生の最大の財産であり、
それを失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

健康を失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

健康を失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

健康を失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

健康を失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

健康を失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

健康を失ふことは、人生の最大の悲劇である。
健康を大切にすることが、人生の幸福の鍵である。

大戦場と小戦場とで大戦場が主目的

大戦場がより多く今後必要とし

ていふので組織が一段落してゐるの

でそれ天幕造るのでもと云へるまで

なく、大企業と小企業は下

等工場制の活動と組織の故に直接

に研究力をもつ場合が多い。大企業は

金規模が大きい。よく大企業に寄るが

その小企業はより有利である。

時代と昔に各種の機関は益々大規模

になつて行く傾向がある。大都市は

大機関の需要と云ふこと。

大都市にある大機関が地方よりも新

市の中や機関を支配してゐる。これは明白

である。本社と支店本家が世に中々あ

らぬ。支社と元支社を支配するといふ

各種の機同の中下支那の役割をもち機同

口民市場で各種の機同活節即ち生業

活節の年同所得額の新書が決定され

各種の機同即ち生業者内ではその内

の位置に在りて年同所得が各個人に於て

決定され。交易の原則は需要供給の

原則によつて正しく各種機同同に又同類

機同内の各々の機同同に配分されると云

ふ事がある。

けれども有物な生業程人に必要とされ

る業とは云へない。人が尊敬する生業は有

物な生業でない。か多い人はある。また

尊敬される人は人に愛され、物を生業に

つてたことと思つてゐる。けれども余りに取得が
くても困るので、そんなことを色々に考へて
人は自分の力と好みと名譽なども考へ
ながら自分の生業を定めよう。あゝか、誰か
自分の希望に満足する生業にありつくのは
とても困難である。人が自分の生業について
自分の好みを色々に考へる場合には、人を
支配する生業についての好みを考へる場
合は多いであろう。

何一生業のためにも地位の低い者は
いふ名を支配する^役を持つてゐる。のは一
面であらう。高い地位にあるものは何
れも低い地位のものを支配するものか。

である。けれども生業によつて地位の如何
拘う不平等の生業はその目的の支配の役割
をへる。生業もある。生業としての
連政治家は其の地位をよつてある
か人をも支配する。自分が自分自身の費
に資金を預け、生業の役割としてある
といふ場合には支配する。それは恐ら
くスポーツの要請と同一の興味を感ぜう
とある。それは甚だ快楽を興味
あるに相違ない。何種かの快楽の存在
はスリルと征服を要し、支配を行
は人同が味はいう。快楽の大きな一
種である。相違ない。即ち生業

上は万民安泰のための王者の道の一部

としてこの

とわかれ、公然の任務であるのにはあつた

人はその能力さえあれば一応それを行
して見たいと思つた。

然し同じ行政の機關が他の諸機關
に對して多額の支拂を要するといふか。

財政的建設に於ける工業は元來

の下部構造の建設的発展に從
つて進行し、財政法王の一種である

上部構造を有する産業形態は

下部構造の變化に伴つて變化して

行く。工業の進行を決定するものは

物質的構造の建設的発展である。

然し吾人をしてはしむればは物理的構造の辨
 證的发展は物理的構造の自力によ
 り起る進行ではなからず物理的構造と政治
 的力の合作によつて起る進行であると思は
 れる。政治的力の希になくれば物理的
 構造は徒らに死滅の運命に向ふ事となる
 であらう。新證法的進行の枠は政治にあ
 けられ下である。この政治的枠組に入る
 によつて人間世界の物理的構造が無限
 に工業的成長を遂げ得るより止まる
 る。たがう宇宙としての国民社会も
 是れが工業的成長を遂げよう物理的構造
 と政治的枠組は必然の存在である。

口民衆の

自給自足構造を現存私業に見る口民衆

命で見たるものは口民衆産業に關する

概の事業体即ち機關をよそにしては

えよ了はあまたない。特に都市に集まる

いは販賣回生の機關即ち各種の

販賣機關及び工業回生の機關即ち

各種の工場を扱う上りたけりな

者は商業に後者は工業に關する

口民衆の機關即ち機關の口民衆の

的構造下は實に素朴なものである

次に下中の組織法的発展を達成させる

政治的組織は革命の過程を通じて成る

の節を造つていふと定けぬ。革命の前
において後において政治的構造が人間社会
に常に存してゐることを免れさせない。政治
的構造は必要である。政治の秩序は常に
ゆきである。革命は破壊のためではなく建設
のためであるから革命によつていふとなくな
るべきものがある。それでは政治体制が
破壊されるばかりである。それはない。そこが
解決的でない。政治的発展の正しい姿
である。政治的発展は星々の政治
政治における革命的發展に外ならない。
かくつて民衆の基礎的な活動に
おもしろい。機關は、もっと大げさなものは

口長官を支配する。新機関は、商
工業と政治に関係する。機関である。
新機関は都市にかけ、機関として次の九種
をあげよう。

- 一、販賣機関
- 二、技術機関
- 三、行政機関
- 四、治安機関
- 五、交通機関
- 六、通信機関
- 七、教育機関
- 八、信託機関
- 九、娯楽機関

機園

右の成瀬工業及政治機園は一、二、三、四、
五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、
十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、
二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、
三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、
四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、
五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、
六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、
七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、
八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、
九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

此れをいふものは人は伊よく食。

て行けばそれ以上のものはないという

考えなり。人は何故に生きつゝいの

かと云ふ疑問にも答をなけれはなら

ぬであらう。それでは先づい

その方には最後の五つの機園即ち教

育、宗教、娯楽の三つ面についてのも

と云ふこんな理解が必要であらう。

「前」の

知しこれ等の三つの様相の人同然におけ
る重要性の意義がどうであらうとす、
唯物的理解の適否についても批判
がどうであらうとモ人の生活の基礎
が物質にあらずと人の社会の安寧
の基礎が政治によつてのすべしこれ等のもの
であるを求へれば、これ等の三つの条件
は人の社会生活の存続のための基礎
的条件であつて、これ等は人の社会生
活にどうとんを確解を道せし行く場
合に人同然の存在の条件を確認
するもののため見出さるるの必要を
いふのである。これ等の三条件がなく

しては人の存在が認められたいと
云つてゐる。それは宗教に對し
娯樂に對しどんな評價を下さう
とせよこれには関係ないであらう。

右の二つは「宇宙」というのの「民衆」を
いつてもよいからである。先の二つは
「民衆」の存在の確證と云ふ
可なりである。何れにしても
「民衆」の存在の基礎を云つて
いふことは、それは畢竟見ゆか
るもの。民衆の活動の成果を
強弱を不安定不安定と云ふのは
俗のタイプミツリな理解による。

讀みよる書かき來。